

# アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(2) —1913年から1915年のサルコリ関連の資料を中心に—

A study of Adolfo Sarcoli's Music Activities(2)  
—Focusing on Documents Relating to Sarcoli, from 1913 to 1915—

直江 学 美 (人間科学部こども学科准教授)  
Manami NAOE (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Associate Professor)

## 〈要旨〉

本研究では、1913(大正2)年から1915(大正4)年の間に日本で書かれた、アドルフォ・サルコリ(1867-1936)に関する資料を提示する。

これら資料を考察し、1913年から1915年に日本で行われたサルコリの音楽活動に関する報告と検証を行う。

## 〈キーワード〉

アドルフォ・サルコリ、西洋音楽受容、イタリアオペラ

## はじめに

本稿は、1913(大正2)年から1915(大正4)年までの日本におけるサルコリ関連の資料をまとめた。日本で書かれたサルコリ関連の資料は、サルコリが日本でどのような音楽活動を行い、当時の日本人にどのように受け入れたのかを物語るであろう。1913年から1915年はサルコリが46歳から48歳の年にあたる。

サルコリの来日は1911年である。つまり、本稿が扱う1913年から1915年末までの3年間は、サルコリにとって、日本人に珍しがられた最初の2年を経た次の期間と言える。

尚、表記は出来る限り記載のままとし、解読不能の文字を■とする。内容が多岐に渡るものに関しては、サルコリに関する部分に下線を加える。( )は筆者の補筆とする。

## 1 1913(大正2)年のサルコリ関連記事より

### 1-1 “声楽家”から“声楽教授者”へ

サルコリの名前が見られる記事は、1913年に入ってから1月発行の音楽雑誌『月刊楽譜』に5件見る事ができる。

まずは「楽論」の欄に「第二年を迎ふ」というタイトルで、当時、松本楽器店編集主任であった加川琴仙によって次のように書かれている。「除夜の鐘聲殷々として吾人は大正第二年の人となりぬ。顧みれば過去一年は我樂壇未曾有の多事なる歳なりき。改春劈頭まず本誌は孤々の聲を揚げ。サルコリー氏柴田女史ヌビナ夫人等の萬丈の意氣は我聲樂界空前の盛觀を呈したり。後半季に至り諒闇中にて寂たるも猶歳晩に於いて多年我樂界に寄興する所ありしユン

ケル氏の告別演奏ありロイテル氏去りしも亦少々俱象的な歌劇熱の現出せしも此歳なり。器樂に比し甚だ振はざりし聲樂は昨年に至り漸く意氣の揚がれるを見る。學友會演奏會に於ても此感あるは自然の趨勢にて時代の一進運と謂はざるべからず<sup>(1)</sup>。」

加川琴仙は、サルコリが来日した半年後の雑誌紙面上で、サルコリの声楽教授希望者を募集した<sup>(2)</sup>(『音楽界』1912.3:58-59)。加川は募集記事の中で、自身を「教授希望の窓口」としており、サルコリが日本で教授活動を行う最初の手助けをした、サルコリの来日初期の支援者の1人である(写真1)。

記事の中の「後半季に至り諒闇中」とは、1912年7月30日の明治天皇崩御により国民が喪に服している状況であり、諒闇中は音楽会などのイベントも自粛された。記事の中で加川は、前年を振り返った所感の冒頭に「月刊音楽」の創刊の事を挙げ、その次に、サルコリの事を記している。サルコリと弟子の柴田環の意氣は「我聲樂界空前の盛觀」と記し、加えて加川は、これまでの日本で「声樂」は、「器樂」に比べて振るっていなかったが、1912年には、諒闇中の時期を鑑みたととしても「漸く意氣の揚がれるを見る」と評している。サルコリの存在が、東京音楽学校の学生による学友會演奏會にも自然と影響を及ぼしていると指摘している。

同号「サロンの噂」の、音楽産業に関する記述の中でサルコリの記述が見られる。

「軍隊は第一戦線に出る歩兵哨隊から兵站の後方勤務まで整頓して戦争が澁滞なく進渉するもので戦線の人糧食

や經理の仕事迄心配してはとても戦へる筈がない。歐米の音楽界でも其通りで技術家の著名なる人程敏腕な音楽代理者（シュジツク、マネージャー）が必ず附随して招聘とか總て其音楽家に關する音楽的方面の一切の事務は其マネージャーに委任して自分の日課に腦力を集注するのである。所が日本ではまだマネージャーを利用するだけの音楽者が無い譯でもなからうがとかく御自分で演奏等の協定をなさるとか。（…）昨年春某劇場で少し妙に大ゲサな音楽會が催された時出演した内外人の洋樂家は皆約束通りの報酬を受けた人がない大抵は半金中には車代まで持ち出しの人もあつた。がその内で一番日本の事情に暗く英語も話さぬサルコリ氏のみ獨り約束通り百五十圓入手したこれはどうした譯かと云へばサ氏には立派なマネージャーが附いてゐるが外の人達はそれがない。日本の音楽者が世界的に發展すればする程マネージャーの必要を感じて來る。近い話しが昨秋なんと云ふ女の歌手が上海へ行た時は毎日萬員の喝采であつたに拘はらず歸國の折は金が足りなかつたと云ふことは某女に屬するマネージャーがなかつた爲め利益を他に吸収されたものである。これは技術以外の報酬問題ではあるが報酬は技術を評價して拂はれるものであらうから單に報酬問題として聞流すべきものではない。<sup>(4)</sup>（『月刊楽譜』1913.3）

日本の音楽界において、マネージャーがいない多くの演奏家とマネージャーがいるサルコリと對比させ、音楽家にマネージャーが必要である事を訴えている。この件に関しては、後も日本の音楽界に通じる課題であり興味深い。しかし、記事の中で言われている、「サルコリのマネージャー」が誰であるかは不明である。

同号「月刊楽譜」の背表紙裏に記載された日本蓄音器商会の広告に、サルコリの名前がある。広告の文字は「諒闇中の清遊、新春第一の娯樂、絶好の御年玉としてニッポノホン蓄音器に勝れるはなし本月賣出しの最新音譜は●柴田環女史及サルコリー氏の夜の調、カバレリヤ、ルスチカナ、バターフライ、リゴレット両面盤、特價金一圓五十錢<sup>(5)</sup>」である。柴田環氏の方が大きく書かれており、当時の世間での人気度が分かる。サルコリと加川琴仙が向かい合う新春の写真とともに、「サルコリ氏環女史と蓄音器」とのタイトルで「昨夏吹込たるアベマリアセレナーデ其他の圓盤は今月より日本蓄音器會にて發賣せらるゝ由。<sup>(3)</sup>」と書かれている（『月刊楽譜』1913.1）。

「樂報」欄には、「サルコリー氏の新企劃」のタイトルで「伊太利聲樂家サルコリー氏の滯留は此年に於ける我聲樂界の振興に多大の寄與する所あり彼の原信子の上海に於ける成功は即ちサ氏の賜物なれば同氏に聲樂教授を受くる内外人昨今非常に増加したるが氏は伊國大使館書記官ガスコ氏等の援助にて今春より歌劇團組織の協議ありと

云えば近々入團希望者を募集するならん。<sup>(6)</sup>」（『月刊楽譜』1913.1）

「此年」とはサルコリが来日した次の年（1912年）である。そしてサルコリの存在が「我聲樂界の振興に多大の寄與する所あり」と評価されている。「同氏に聲樂教授を受くる内外人昨今非常に増加」との言葉から、1912年3月に募集を行った「聲樂教授希望者<sup>(2)</sup>」が多く集まったことが推測できる。サルコリが日本で聲樂の教授を始めたことは、一時立ち寄るだけのつもりであった日本にある程度の滞在を決めたこと、そして「演奏家」として来日したサルコリが、「指導者」としても活動を広げたことを意味する。

文章をみていく。「原信子の上海に於ける成功」とは、前年1912年秋に原信子が上海で演奏を行ったことを指している。原信子も後に「私もまもなくシナに行ったのよ。サルコリー先生がシナに行かれ、私に上海に来て、日本の娘による《バターフライ》をやれと云って來られたので、大使館の人たちからもぜひとすすめられたし、とうとう学校もやめて洋行しちゃったの。」と、上海行きは、サルコリの発案であったことを語っている。また、上海行きに関しては「サルコリー先生は、私がもう（東京音楽学校を）卒業したものだと思っていたんで、呼んでくださったんだけど、さっきのようないきさつ（原信子は東京音楽学校本科への進学試験で、聲樂科を落ちてピアノ科となった。その後三年の三学期だけ聲樂に転科したため、聲樂科での卒業が許されず、もう一年、聲樂科で学ばされる事となった件）で、まだ卒業していなかったんで、その時はぜひぶん考えちゃったわ。なにしろ、祖界にあったヴィクトリアという劇場で、長期間と言う話しなんで、そんなに長く学校は休めないし、仕方ないから上野をやめて出かけたの<sup>(6)</sup>」と付け加えている（原信子 1965：144）。この原信子の証言によれば、原の東京音楽学校中退は、上海での演奏を決めたことが理由だったということになり、後にミラノのスカラ座で歌い、日本の聲樂界の重鎮として存在した原信子が初めて海外演奏を行ったきっかけがサルコリであったこととなる。上海で演じられた〈マダム・バターフライ〉はオペラ全幕ではなく、アリアを歌ったものと思われる。他にも、『東京朝日新聞』に「原のぶ子歸る」とのタイトルで、原信子の上海での演奏会の記事が掲載されている。『伊太利聲樂家サルコリー氏の弟子として上海に赴き同地ヴィクトリア座にて獨唱をなし意外の好評を博して廿九日門司着世日夜八時新橋に着したる原信子（廿）を本郷區湯島同朋町八の宅に訪ふ、其談に「私が上海へ参りますと世間ではサルコリー先生と妙な噂を立てましたから彼方でも先生に教えて戴く積でしたが只劇場でお會ひ申す位なもので先生と私は全く往復しませんでした（…）先生は上海に残つて居らつしゃいますが何れ日本へ再び來らつしゃるさうです、

上海では非常な評判を博しまして香港からも米國佛國からも來て呉れぬかと云ふ話でありましたが監督として従いて行つた母(そめ子)が薄々悪い噂を聞いて心配しますから歸つて來ました」<sup>(7)</sup> (『東京朝日新聞』1912年11月2日)

この「東京朝日新聞」の記事は、原信子の談として書かれているが、女性が男性教師の元で歌の稽古をつけてもらったり演奏のために師匠と遠方に出かけた事が、当時の日本では好奇に映った事が分かる。

## 1-2 サルコリの音楽活動

サルコリの名前は、音楽雑誌『音楽界』の第6巻第2号「名家談論」にも見られる。「模倣時代の音楽」という題で田村寛貞(1883-1934)が次のように書いている。『音楽界』に於ける最も大きな現象と見る可きは、彼の歌劇問題であらう。その演り方を見るに根本的に誤つて居たと云ふても過言では無からうと思ふ。彼のザルコリーと環女史とに依つて演ぜられた「カバレリヤ、ルスチカナ」の外に純日本式と稱する「熊野」と「釋迦」とがあつたが、此の日本式なる物は日本語の文句に、専門でない人が、曲を附した小歌劇があつた。<sup>(8)</sup> (『音楽界』1913.2:75)

次の「マンダリンの流行」というタイトルにも、サルコリの名前が見られる。

「昨年來朝ミランの樂人サルコリー氏が、獨唱の餘技たるマンダリンを慶應義塾學生に教へて其の耳新らしきオーケストラを青年會館と女子職業學校とで開いてから、マンダリンの流行が學生間に起つて來た、マンダリンの本場は南歐伊太利の地で、エニスの水郷に孤舟に棹しながら月夜のマンダリンを弾く程遊子の旅情をそゝる物はないといふ。(…)我國では日留間賢八氏が久しき以前からマンダリンの個人的教授をやつてゐる。巴里仕立のしやれ者男爵岩村透が東京美術學校内でやつてをるマンダリン音樂團などが我國に於けるマンダリンの嚆矢であらう。<sup>(9)</sup>」(『音楽界』1913.2:78)

これによると、サルコリは1912年にマンダリンを慶應義塾の學生に教え始め、青年會館と女子職業學校で演奏會を開いた。サルコリが日本で行つたことの一つに、日本の學生へのマンダリン指導が挙げられる。この記事によると、サルコリの指導の結果、マンダリンが學生の間で流行したという。

『音楽界』第6巻第6号の「内外彙報」にある「帝劇の魔笛と有樂座のボヘーメ」の記事にもサルコリの名前が見られる。「帝劇の歌劇部は柴田環女史脱退以來兎角振はざりしが今六月狂言中幕に大歌劇魔笛二幕を上場し從來の清水金太郎氏の外原信子及音樂學校聲樂部出身の原田潤氏を加へ大規模に開演する計畫なりと魔笛は樂聖モツアルトの傑作に係りフィガロ(結婚曲)ドンヂアン(鬼將軍)と共に

モツアルトの三名曲と稱せられ筋は埃及の神話を脚色せるものにて舞臺面の絢爛華麗なる言語に絶し會てヴェートベンもモ氏の作物中最も優美なるものなりと嘆賞せし程にて一千七百六十一年奧都維也納の劇場に初演されてより以後歐洲各地に上場さるゝ毎に大喝采を博せるものなりと又六月下旬には京濱間に在留の外人達は有樂座にて之れ又大歌劇を催さん計畫あり目下在留の伊太利聲樂家ザルコリー氏の手により衣装背景等の準備中なるが出し物はプチニーの名作ボヘーメにて露國大使令嬢も自ら登場すべしとの噂専なり<sup>(10)</sup>」(『音楽界』1913.6:70)

この記事以降、サルコリの名前が見られるのは演奏會に出演したことを示すものがほとんどである。以下に順に記す。

「▲サルコリー氏音樂會 十二日午後七時より京都青年會館に於て開催伊太利聲樂家アドルホ、サルコリー氏米國洋琴(ピアノ)家ライサー女史、提琴(ヴァイオリン)家杉山長谷夫氏等出演せり<sup>(11)</sup>」(『読売新聞』1913.6.17)

「サ氏音樂會 昨年來朝し帝國劇場に演奏して多大の賞賛を博したる伊太利の聲樂家サルコリー氏は今回歸國の途次京阪にて演奏會を開催することとなり同氏の外にピアノ名手サイラー嬢並に東京音樂學校出身杉山長谷夫氏出演にて十二日京都青年會館十四日大阪青年會館にていづれも午後七時開演したりその曲目左の如し◎第一部 ピアノ獨彈(サイラー嬢)ヴワルス(ボルヂニー作)エチュード(シヨパン作)▲二獨唱(サルコリー氏)トスカ(プチニー作)▲三ヴワイオリン獨奏(杉山長谷夫)レゲール(ウニアウスキー作)▲四獨唱(サルコリー氏)リゴレット(ヴェルヂ作)◎第二部 五ヴワイオリン獨奏(杉山長谷夫氏)スウベニーア(ドルドラ)セレナーデ(ドルドラ)▲六獨唱(サルコリー氏)マダム、バタフライ(プチニー作)▲七ピアノ獨彈(サイラー嬢)ソナタ(ベートフエン作)▲八獨唱(サルコリー氏)マチナータ(レオンカバロ作)<sup>(12)</sup>」(『音楽界』1913.11:70)

「○歌劇演奏會 過般來朝目下滞京中の米國オペラシンガーなる、フランシス、モット夫人は去る十月八日帝國ホテルに於て演奏會を開き喝采を博せしが金子子爵、及各國大使の賛成により十月十九日午後一時より帝國劇場に於いてオペラチックコンサートを開催多大の稱賛を博せり尚當日の出演者は伊國人サルコリー氏外數氏なりき。<sup>(13)</sup>」(『音楽界』1913.11:65)

「○ウエルデー記念演奏會 去る十月十日は伊國歌劇作曲家大家ヴェルデー誕生百年に相當するを以つて伊、露兩國大使館伊國人協會及帝國ホテル主催となり去る十月二十八日夕より帝國ホテルに於いて露國大使令嬢、柴田環、中島かね子サルコリー外數氏の出演にてヴェ氏の作品數番を演奏し九時過ぎ散會せり。<sup>(14)</sup>」(『音楽界』1913.11:66)

「○大阪帝國座の音樂會 ヅブテウイチ氏のヴァキオリン、サルコリーの聲樂、パウロスキー氏のピアノ及び東京マンドリン團の演奏会は十月二十八日午後一時より大阪北濱帝國座に於て開催せり曲目左の如し、第一部一ヴァキオリン、ピアノ二部合奏、短に調（ママ）（リース作）ドブラウイチ氏、パウロスキー氏二ピアノ獨彈哀悼行進曲（シヨパン作）パウロスキー氏、三男聲獨唱歌劇ローエングリンの一節（ワグネル作）「我れ御身の爲に戦はむ」サルコリー氏、四マンドリン四部合奏行進曲「喫煙」小夜樂「ヴェラスの夕べ」（サルトリ作）東京マンドリン團 第二部五ピアノ獨彈、黄昏樂（リスト作）パウロスキー氏、六マンドリン四部合奏、い歌劇「トロバートル」（ヴェルヂ作）ろ舞曲「眠れよ愛し兒」（サルコルー作）東京マンドリン團、七ヴァキオリン獨奏、いロマンス（ヴィニアスキー作）ろガボット（コッセス作）はクラレーベ（バツハ作）ドブラウイチ氏、八男聲獨唱、歌劇「ファンチュラ、デル、ウエスト」の一節（フチコー作）サルコリー氏<sup>13</sup>（『音楽界』1913.11：68）

『●ヴェルディ音樂會 伊太利の樂聖ジュゼリベ、ヴェルディの百年を記念した音樂會が三十日の晩帝國ホテルで開かれた 主催者として斡旋した伊國大使グイチオリ候夫妻を始め各大使夫人令嬢と内外の外交官夫人の粹は一當に集まつた、曲はヴェルディの作中の人氣のある物、定評のあるサルコリー氏の歌劇「アイダ」は言わずもがな、中島兼子嬢の歌劇「トロバトレ」の危氣のないのと一年餘も樂壇に音づれなかつた三浦環夫人の「リゴレット」、鶯色の衣服さへ以前の儘の輕妙な技には圓みがついて稍落着きの見える態度で樂壇に再び現れたのが嬉しくも心強く思わせた、斯道の専門家をさへ凌ぐというドプロポルスキー夫人の「アイダ」の高音獨唱洵に清らかに澄んだと言ひ度い、最後の四部合唱は申す迄もなく、伊太利の音樂に相応ふマンドリンの二曲は澄んだ空と水との間に檜の様に浮ぶゴンドラを思はせる、軍樂隊のトラビアタも立派で散會したのは十一時過ぎ（△）<sup>14</sup>（『東京日日新聞』1913年11月1日）

「○ヴェルデー記念 演奏會前號所報の如く歌劇作曲大家、ジュエツペ、ヴェルデー百年祭記念演奏會は十月三十日帝國ホテルに於てヴ氏の作品のみを演奏せり曲目左の如し▲第一部△管絃樂歌劇「トロバートル」海軍軍樂隊△男聲中音獨唱歌劇「バロイン、マスケラ」タム氏△女聲中音獨唱歌劇「トロバートル」中島兼子嬢△男聲高音獨唱歌劇「アイダ」サルコリー氏△女聲高音獨唱歌劇「リゴレット」三浦環夫人▲第二部△管絃樂歌劇「トラビアタ」海軍軍樂隊△女聲高音獨唱歌劇「アイダ」ドプロポルスキー夫人△マンドリン、オーケストラ歌劇「トロバートル」小曲「ミゼレー」東京マンドリン團△四部合唱歌劇「リコレット」ドプロホルスキー夫人、中島兼子嬢、サルコリー氏タム

氏<sup>15</sup>（『音楽界』1913.12：53）

「●明治音樂會 今年最後の演奏會は餘定の如く帝國ホテルに開かれた、第五十九回目といふ、回は一回と近頃めき、努力の跡が見える、チャイコフスキーのオパチユア、ハムレットを曲目の第一にして第二のシュベルトのシムホニーは聴衆を恍惚とさせ、第三のフリユート、オーボ、クラリト子ツト、バズン、ボーンの合奏仏蘭西の昔の踊は如何にも陽氣に想わず手拍子を打たせる、第四の窪氏のヴァイオリン獨奏の腕は却、凄いものだった、二部に入つてヴァイオリン、ヴァイオラ、セロボーンの合奏、サルコリー氏の獨唱例もながら人氣がある、最後のチョコレート兵隊で浮かれさせて終わつたのが十時半、唯いつも氣になるのは眞？に板を塗つた舞臺である、折角音から味はうとする仙境の価値は半分黒ずんだ氣持で掻き消させる<sup>16</sup>」（『東京朝日新聞』1913年12月15日）

これらの記事によると、サルコリーは1913（大正2）年6月、イタリアに一時帰国をしたようである。帰国する道中、6月12日に京都青年會館で、同14日には大阪青年會館で演奏会を開いている。共演者はピアニストのサイラーと東京音樂学校出身のヴァイオリニスト杉山長谷夫であった<sup>17</sup>。このコンサートの後、日本でサルコリーの記事が見られるのは同年10月である。よって、サルコリーのイタリアへの帰国は3か月程度であったようである。10月はまず8日に帝國ホテルで「歌劇演奏會」に出演、その際金子子爵、各國大使の賛成により、19日にも帝國劇場にて「オペラチックコンサート」を行うこととなった<sup>18</sup>。その後サルコリーは、10月28日夕方に、イタリア、ロシア兩國大使館、イタリア人協會や帝國ホテルの主催による「ヴェルディ記念演奏會」に出演しているとの記事が『音楽界』に記載されている。共演者は、ロシア大使令嬢、柴田環、中島かね子、サルコリー、他数名の出演者で、曲はヴェルディの作品とのものである<sup>19</sup>。しかし、同日午後1時より「大阪帝國座」でもサルコリー出演の記事がある<sup>20</sup>。「大阪帝國座」の出演者はヅブテウイチ（ヴァイオリン）、サルコリー、パウロスキー（ピアノ）、東京マンドリン團と記載されている。『東京朝日新聞』の「ヴェルディ音樂會」の記事には、「三十日の晩帝國ホテルで開かれた<sup>21</sup>」との記載があり、『音楽界』第6巻第12号の「樂況」にも「十月三十日帝國ホテルに於いて」とあるので<sup>22</sup>、雑誌「音楽界」第6巻第11号の記事が誤りで、正式には、10月28日午後1時より「大阪帝國座」のコンサートに、10月30日夕方から「ヴェルディ音樂會」に出演しているのが正しい。ただし、「ヴェルディ音樂會」の終演時間は、「音楽界」では9時半過ぎ<sup>23</sup>、「東京朝日新聞」では11時半過ぎ<sup>24</sup>とされ、違いが見られる。

12月に入り、サルコリーが「明治音樂會」に出演をしている記事が『東京朝日新聞』に掲載されている。記事では、

サルコリの独唱が「例もながら人気がある<sup>88)</sup>」と評されている。日本人にとってサルコリの存在が定着してきたことが伺える文章である（『東京朝日新聞』1913年12月15日）。

## 2 1914（大正3）年のサルコリ関連記事より

### 2-1 上半期の音楽活動

1914年も年頭の記事にサルコリの名前が見られる。1月1日付『萬朝報』3面の「文學及音楽会」に「昨年の文壇を通じて單に沈滞の氣充溢せりというものあらば。（…）文壇の淋しかりしに反して樂壇の賑かなりしこと亦前古に比なく、ショルツ、クロン二氏の着任（一月）ジルバ夫人（十月）モレンドルフ譲等の演奏、ワグネル百年祭（五月）ヴェルディ百年祭（十月）ワイルハアモニイ演奏會（十一月）藝術座音楽會の開催、過激『魔笛』及マルタの上場ホト、ギス社主催の文藝招待能等殆んど數ふるに違あらず、此間に在りて我聲樂界に少なからざる影響を及ぼしたるハ伊人サルコリイ氏の活動なるべし 而して諸種の樂團の興起は亦劇團の興起と其勢を競ふの觀ありき<sup>89)</sup>」とある。サルコリの音楽活動が日本の音楽界に影響を及ぼしたことを指摘している（『萬朝報』1914年1月1日）。音楽雑誌では、『音楽界』1月号に「ベルディ誕生百年祭演奏會」のタイトルで、高折周一が1913（大正2年）10月30日行われた「ヴェルディ記念音楽会」について感想を書いている。これによると、「殆ど満場空席なき迄に詰めかけた」「八時三十分から帝国ホテルに開かれた。（…）既に開會時間十分を過ぎては始まらない。二十分過ぎては一向始まる模様がない。ヤツと九時になつて序幕が開かれた」という。サルコリの歌唱に関して『第四テノール、ザルコリ氏の獨唱「アイーダ」の「ケレスチアル、アイーダ」は非常に難づかしいメロヂーであるから、無論餘り多きを望むことは出来ないが、併ながら同氏の當夜の歌ひ方に於ては全然同意することは出来ない。殊に其の呼吸遣ひ法に至つては少しも「アイーダ」の表情を發揮してみない却てアンコールの「リゴレット」の「ラー、ダンナ」の方が遙かに優つてをつた。「ラー、ダンナ」は誰が歌つてもあの通りで、緩急強弱に少しも可笑しいと思ふ處はなかつた。ただ若し第一流の人によつて歌はれるれば、あの技に美しい花が咲くだけの事と思へば間違いはない。』と辛口の批評を述べており、暗にサルコリのことを「一流ではない存在」と位置付けている。一方三浦環に対しては「共に結構な出來で、中々達者なことゝ感服した。<sup>90)</sup>」と評価している（『音楽界』1914.1：35-36）。

続いての記述で「ここ（三浦環の演奏）で第一部は終わった、時計を見ると十時である。當夜は他に主要な約束があつた爲め、第二部は残念ながら聴き残した。<sup>91)</sup>」とある。この高折周一の言葉と『東京朝日新聞<sup>92)</sup>』の記事により「ヴ

エルディ音楽会」の終演は11時半であろう。

3月に入ると「湯原音楽学校長（東京音楽学校長）談」として、日本に來た外国人音楽家に関する文章が掲載された。タイトルは「樂の界新曙光」で、「近來泰西の名樂手が頻々として來朝又は招聘せられ爲に樂界は撥瀾たる活況を呈し漸次樂界に新曙光を呈するに至つた」の書き出しである。この記事の中に出てくる外国人は、東京音楽学校の教員、ロイテル、ユンケル、グローン、ジョルツ、グローンと、彼らの演奏技術を例えるために、演奏のために來日したドラホンメレンドルフ嬢である。その他に「ジョルツ、グローン氏の外に外人音楽家否獨唱家として件太利（ママ）のザルコリー氏がある」と、東京音楽学校関係者以外で唯一サルコリの事が記述されている。以下に記す。「（サルコリ）氏も獨唱家としては非凡の才能を持つた人であるが不幸にして本邦來朝後適當な地位を得ずして、落魄の境遇に居らるゝため得意の技倆を示す場合の些ないのは本人のためにも誠に氣の毒な事であると思はれる、出來得べくば相當の援護者が出て長く日本に留まつて居て欲しい<sup>93)</sup>」（『音楽界』1914.3：50）

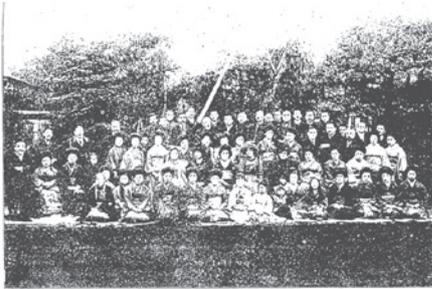
東京音楽学校側のサルコリに関する記述は珍しい。記事は東京音楽学校校長の肩書で、湯原がサルコリの事を「非凡の才能を持つ」と評価しており、また、日本での待遇が良くない事を指摘している点が貴重な文章である。

3月11日付の『讀賣新聞』に2件サルコリの名前が書かれた記事が見られる。「會いろへ」の欄に「三浦環原信子ザルコリー清水金太郎窪兼雅諸氏出演 明十二日午後七時青年會館劇樂大演奏會主催新劇社<sup>94)</sup>」の記事、「小消息」欄には、「△サルコリー氏のお名残 久しく日本に在しサルコリー氏はいよゝ五月伊太利へ歸るに付き十二日の青年會館の演奏會ではお名残として充分唱ふ筈なりと<sup>95)</sup>とある（『讀賣新聞』1914年3月11日）。その後12日付『讀賣新聞』の「よみうり抄」には、「サルコリイ氏は來る五月故国伊太利へ歸るので、本日青年會館での獨唱は氏が我邦に於けるお名残出演となるべく尚ほ十五日からは関西地方に向ふ<sup>96)</sup>」と紹介されている（『讀賣新聞』1914年3月12日）。この「青年會館」でのコンサートに関して『音楽界』に「樂劇曲演奏會 樂劇に就ての研究と其名曲を擴く紹介せん爲め新劇社は標題の如き演奏會を企て三月十二日神田の青年會館にて最初の演奏會を開催することゝなり三浦環、原信子、清水金太郎、ザルコリイの諸氏其他帝劇歌劇部員中よりなる四部合唱團も出演す<sup>97)</sup>」との内容が載せられている（『音楽界』1914.4：76）。

『讀賣新聞』に記述があつたサルコリのイタリアへの帰国に関しては「○サルコリイ氏 六月八日、午後新橋發西比利亞を経て、伊太利に歸る尚ほ同氏は今秋九月ガスコ氏相携て來朝せらるゝといふ。<sup>98)</sup>」との内容が『音楽界』の7

月号「樂人動靜」に紹介されている（『音楽界』1914.7：70）。サルコリは、6月8日にイタリアに一時帰国し、出発時は9月に日本に戻ってくる予定であったようである。

1914年にはサルコリの弟子である三浦環が「銀鈴会」を創設した。（写真3）



（写真1 『銀鈴會開會式』<sup>27)</sup>

5月発行の『音楽界』の「中央楽況」に「銀鈴会」の紹介と、演奏会の記事が載せられている。「銀鈴会とは家庭音楽の普及と趣味の鼓吹を目的として三浦環女史を會長とし第一演奏會を（四月）二十一日午後二時より有樂町なる保險會社協會に開催し三浦女史の獨唱月の旅外小泉石原兩嬢のピアノ獨奏關屋増田兩嬢の女聲高音獨唱高橋水田兩嬢の中音獨唱第二部にてはサルコリーベツオールド夫人の獨唱ベツオールド夫人のピアノ獨彈等あり<sup>28)</sup>」（『音楽界』1914.5：63）

同号の「音楽文壇」には「○マンドリン獨習 高濱孝一著 西洋音楽器中で最も手軽で上達の早いのはマンドリンである、近頃サルコリー氏のマンドリン演奏會以來東京にて非常の流行しつゝある、本書は高濱孝一氏の新著でサルコリー氏と密接の關係ある加川琴仙氏が助力されたるものなれば此の種出版物中最良の書たるは偶然ではない、定價七十五錢 東京銀座松本楽器店撥行<sup>29)</sup>とあり。前年の『音楽界』の内容<sup>30)</sup>と同じく、サルコリの存在により日本にマンドリンの流行が生まれた事が書かれている。（同上：71）

## 2-2 下半期の音楽活動

サルコリが6月にイタリアに帰るとの記事の通り、しばらくサルコリ関係の記事は見られなかった。11月17日付の『東京朝日新聞』に「近代樂大演奏會 出演者は暫らく顔を見なかつたサルコリ氏とソプラノのモット夫人、洋琴の澤田柳吉氏に海軍軍楽隊の管絃樂が加はつて十四日七時に神田の青年會館で開くといふ、モット夫人とサルコリ氏の獨唱はかねての定評に委ねる、近代樂と名を被らせるのは澤田氏の獨奏にあつて太田黒元雄氏が歐州動亂の始まる前に倫敦から歸朝の携へ歸られた印象派と未來派の作品で、バチユルスキー、ウランゲル、シュミット、スクリアピン、シェーンベルグ、ラツハマンノフ類と中には將來を有

つた青年作曲家等が物した小曲もある相ではあるが、何だか譯の解らない茫とした物で輪郭の判きりしない繪でも見る様な心持がした、他に何とも言ひ様がない、最後に人氣者のサルコリ氏とモット夫人が管絃樂に伴れて歌劇ファウストを歌つて閉會したのが九時半であつた<sup>31)</sup>」の内容でサルコリの名前がある。サルコリは「人氣者」とされており、この頃には、サルコリがさらに日本に定着していることが感じられる。この記事で分かることは、今では「近現代」とされている時代区分が「未來派」とされていること、これらの曲が「訳の解らない」と形容されていること、スクリヤービン、シェーンベルク、ラフマニノフ等の樂譜が、太田黒元雄によって欧州より持ち込まれおり、その樂譜を中心に演奏會が開かれていたことである。サルコリも、イタリアから樂譜を持ってきていた。当時はこれらの様に、人を介してヨーロッパから西洋音楽が入ってきていた。つまり、日本における西洋音楽の移入には人が持つネットワークの影響が大きく、また、人が関係する範囲を中心に音楽が「分割されて」日本に入ってきたといえる。「近代樂演奏會」のプログラムは翌年の『音楽界』1月号に掲載されているので後記する。

年末には「大正三年の樂界を送る」とタイトルが付けられた1914年を振り返る記事の中に「八月二十二日にモット夫人が鎌倉に於て其獨唱會を開かれたる、九月二十日には愛國婦人會主催の下に恤兵寄附大音樂會を帝國劇場に開きて同夫人の妙技を振はれたる、更に十一月十四日に於てザルコリー氏モット夫人が美土代町青年會館に近代樂の演奏を行なれたる如き<sup>32)</sup>と、山本正夫が書いている。（『音楽界』1914.12：1-3）

## 3 1915（大正4）年のサルコリ関連記事より

### 3-1 1915（大正4）年上半期の音楽活動

1915年は、サルコリの資料が多くみられる。まず1月発行の『音楽界』に前年11月に開催された「近代樂演奏會」のプログラムが掲載された。

「子爵本田實方氏主催の同會は十一月十四日午後七時より神田青年會館に開かる同會の目的は最近歸朝せる太田黒元雄氏の英京倫敦より齎したる最新流行の者を中心とせし者にてモット夫人のソプラノ獨唱伊太利より歸朝後初めて出演せるザルコリー氏のテノール獨唱等の外特に海軍々樂隊の演奏ありて頗る盛況を極めたり最後に妹尾氏作曲の青島陥落行進曲は海軍々樂隊に依て演奏せらる 一、管絃樂（海軍軍楽隊）（イ）序樂、レイモンド トーマ作曲（ロ）意想曲、森のさゝやき チブルカ作曲（ハ）行進曲、勝利の戰 ブロン作曲 二、獨唱（モット夫人）（イ）水の精 ガラツテン作曲（ロ）西班牙の女 シヤミナーデ作曲 三、洋琴獨走（澤田柳吉氏）印象及び未來旅の作品と其の

傾向 (イ) 前奏曲 (短ハ調) バテユルスキー作曲 (ロ) 歌調 (長ヘ調) ウランゲル作曲 (ハ) 夢みつゝ (短ヘ調) シユミット作曲 (ニ) 前奏曲 (長ホ調) スクリヤビン作曲 (ホ) 前奏曲 (長嬰口調) スクリヤビン作曲 (ヘ) 四個の小曲 (未來派) シェーンベルク作曲 (ト) 戦災の跡 (短嬰ハ調) ラフハマニノフ作曲 四、獨唱 (サルコリ氏) 歌劇「トスカ」 プッチニ作曲 五、管絃樂 (海軍軍楽隊) 交響樂 (短嬰口調) シューベルト作曲 六、管絃樂附獨唱 (モット夫人) 歌劇「ルイーゼ」シヤルボンテイエー作曲 七、管絃樂、喜歌劇「自動車の女」アンバート作曲 八、管絃樂附二聯唱 (モット夫人, サルコリ氏) 歌劇「ファウスト」 ゲーノー作曲<sup>33)</sup> (『音楽界』1915.1: 53)

『音楽界』3月号に名古屋で設立した「中京音楽會」の記事があり、サルコリが「中京音楽會発会式」で演奏し盛況だったことが書かれている。「發會式の際はザルコリー氏の出演ありて頗る盛況を極めたりしが、御諒闇中深く謹慎の意を表して定期の開會を中止したり。<sup>33)</sup>」サルコリの名前が全国的に知られていたのか否かは定かではないが、サルコリが名古屋で行った演奏も好評であったようである (『音楽界』1915.3:44-45)。また同号の「新刊楽譜」欄に「マンドリン獨習之友<sup>34)</sup>」に関する書評が紹介されている (同上: 広告欄)。

### 3-2 2回の「ヤマノ音楽会」

サルコリは4月に「ヤマノ大音楽会」に出演した。「ヤマノ大音楽会」は「東京銀座松本楽器店を繼承せるヤマノ楽器店は音楽普及の目的を以て四月十七日其第一回大音楽會を帝國ホテルに開き午後七時開會せらる<sup>35)</sup>」という。サルコリは、シヨルツの伴奏で〈カルメン〉「花の歌」、〈道化師〉「カニオの歌」を歌っている。他の出演者はシヨルツ、蘭部房子、小泉千賀子、窪兼雅、澤田柳吉 (『音楽界』1915.5: 75-76)。



(写真2「サルコリの獨唱振り」<sup>36)</sup>)

「ヤマノ音楽会」に関して『月刊楽譜』に「藝術の花咲き亂れしヤマノ大音楽演奏會」のタイトルで『サルコリはシヨルツ氏の伴奏で佛国歌劇「カルメン」の第一幕、ドンジヨトゼの花の歌を唱つた。「此の花、お前にもらつた此

花に、私の心は融けて行く、オーカルメン、私の愛人はお前だ…」熱烈の血がほとばしるやうな聲はサ氏の肺腑から響いた。而して聴く人は思はず手に汗を握つた。歌は終わったが喝采又喝采、サ氏をして壇上を去る事を許さない。伊太利の名歌マチナタは非常な技巧を以て亂奏された。(…)サルコリ氏は再び壇上の人となつた。曲はレオンカバロの歌劇「道化師」である。あの伊太利の町に花やかな旅俳優の一團がついた處である。主人公たるカニオが之から芝居に行かうと唱ふ一篇中のけっさき。妻の不身持を悲しむ気分や強いて笑ひに心配をまぎらす心持が完全に歌の上に表現されたので、聴衆は只もう酔つたやうになつてしまつた。而してプッチニが英國皇帝に捧げた大歌劇金鑽の少女の一節を礼奏して別れを告げた。<sup>37)</sup>」と書かれている (『月刊楽譜』1915.5: 36)。記事には会場の写真も掲載されており、満員の客席の様子が分かる。



(写真3「帝國ホテルヤマノ音楽會」)

「ヤマノ音楽会」は6月5日に、第二回目が開かれ、サルコリも再度出演している。第二回の音楽会に関する記事には「●ヤマノ音楽會 六月五日夜帝國ホテルにて開會、近く劍を堤げて故国の難に赴く可きテール (ママ) 歌手サルコリ氏の送別を兼ねタム、ストロム、パウロスキの三氏メンドルソーン嬢東京横濱兩マンドリン倶楽部員出演マンドリンオーケストラ中には海のささやき、ロンバルダの小夜樂等あり<sup>38)</sup> (『東京朝日新聞』1915年5月26日)、『●東人西人 (…)<sup>39)</sup> △來月五日帝國ホテルで開催の筈の音楽會にはサルコリー。パウロウスキー。タム。ストロム諸氏とメンデルゾン嬢とて時節柄伊太利物許りやる事になつてゐた處伊國の宣戰布告でサルコリー氏は歸國との取沙汰△然るにサルコリー氏は自分は歸らないが却てパウロウスキー氏は招集されて歸國するから出演出来ないと断つて來たといふ△パウロウスキー氏は奥地利人だが歸國さへしないと其音楽會には敵同士が一つ舞臺に立つ譯になる△ソコで在人が「では敵同士と一緒に……」と言ひかけるとサルコリー氏が遮つて「外國に來て居ては敵味方はない」<sup>39)</sup> (『東京朝日新聞』1915年5月31日)、『□第二回山野大音楽 銀座四丁目山野楽器店主山野政太郎氏が斬道開發の爲め援除的に經營しつゝある山野音楽會は其第二回演奏會を來る六月五日午後七時半より帝國ホテルにて開催する事となれり。今回の立案は凡て在京伊太利聲樂家サルコリ氏の計畫に従ひ

同氏が全力を盡して其の指導を爲すものにして、從來の會と異なり曲目は聲樂及マンドリン樂の優秀なるものを主となしたれば確かに斬界の萬緑叢中紅一點たるべきものも出演者はサルコリ氏(テノル)タム氏(バリトン)ストロム氏(バス)メンデルソン嬢(ソプラノ)パウロスキー氏(ピアノ)東京マンドリン俱樂部、横濱マンドリン俱樂部指揮者サルコリ等合計參拾餘名にして、其の演奏曲目の確定せるもの左の如し▲曲目▼一、マンドリンオーケストラ(東京横濱マンドリン俱樂部)歌劇「悪魔」ノ抜萃曲 オーベル作曲○二、バリトン獨唱(ネトロムタム氏)歌劇「道化師」の内喜劇役者トニオの開幕歌レオンカバロ作曲○三ピアノ獨奏(パウロスキー氏)シヨパンの歌調に依るポロネーズリスト作曲○四、バス獨唱(ストロム氏)我は山を漂泊ひぬ○レーア作曲○五二部合唱(タム氏サルコリ氏)歌劇「運命の力」の内「今こそ我は誓にぬ」二聯唱ウエデイ作曲◎休憩○六、マンドリンオーケストラ(東京横濱マンドリン俱樂部)甲、海のさゝやきポツタキアリ作曲乙、ロンバルダの小夜樂アルフィエリ作曲○七ソプラノ獨唱(メンデルソン嬢)歌劇「トスカ」の内女優トスカの「愛ト音樂」の歌プツチニ作曲○八、ピアノ獨奏(パウロスキー氏)ヘローテ曲シヨパン作曲○九バス獨唱(ストロム氏)雄鴨は西に行きぬサンダーソン作曲○十、三部合唱(メンデルソン嬢、タム氏サ、ルコリ氏)歌劇「ランメルムーアの花嫁」(ウオーターハコットの小説)の内我を仰さるは何ぞの三聯唱ドニゼッチ作曲<sup>40)</sup>(『音楽界』1915.6:65)である。コンサートの批評や報告記事は『●ヤマノ音樂會 五日夜七時半より帝國ホテルに開催、サルコリ氏指揮横濱マンドリン俱樂部員出演のマンドリンオーケストラは珍しき演奏なるより近來の盛況を見たり、オウベル作曲の喜歌劇「悪魔」の抜萃曲はサンマルコの侯爵と名乗れる海賊の戀物語にして俱樂部のリーダーたる田中常彦氏のソロは群を抜き、第二部「海のさゝやき」と「ロンバルダの小夜樂」とは共にメロデヤスなる南歐音樂の粹にして、水郷廢都の春を惜しむが如きマンドリンの甘きすゝり泣きとギターの強き嵐は眞に感傷の想ひに堪へざらしむ、サルコリ氏の全身的なる指揮は幾度かアンコールの拍手を呼ぶ(椰)<sup>41)</sup>(『東京朝日新聞』1915年6月7日)、「山野音樂會 六月五日夜七時半より豫定の如く帝國ホテルに開かる内外人の聴衆にて空席なく東京横濱マンドリン俱樂部の合奏は確かに練習の効果を見せたり田中常彦氏のソロは群を抜きサルコリ氏タム氏メンデルソン嬢は當日の壓巻なり伊國の宣戰布告の爲めにサルコリ氏は國家の急に赴て歸國さるれば或は最終の出演なるべしとの説ありしが當夜出演する筈なりしパウロスキー氏は塙地利人にて招集に應じて歸國さるゝといふ。<sup>42)</sup>(『音楽界』1915.7.1:52)、『第二回山野大音樂界六月五日第一土曜日、初夏の蒸し暑い風が柳の枝に

吹きあぐんだ夕、本社主催の山野音樂會は帝國ホテルに開催されました。いつも乍ら會場は清楚な内外人の姿で満され中にも伊太利大使グイ。ヂョリー侯爵夫妻のご臨席は注意の集點となりました。七時參拾分振鈴でカーテンがあがりますと東京横濱マンドリン俱樂部三十名がサルコリ氏の指揮で、歌劇「悪魔」の抜萃曲をばマンドリンオーケストラとして奏し始めました。雨の様な其音、ギタを手にしてのサルコリ氏の指揮ぶり、兩々相應じてアツと感心させてしまひました(…)當夜の呼物である歌劇「運命の力」二人の戦友が戦争に出た。此處はヴェレトリに近い陣營の場でサルコリ氏のドンアルバロが傷いてカラトバラ侯爵の子孫ドンカルロ(タム氏)に云い残すくだり。死の音が近づく様なピアノの音に沈痛な唱歌は流れて行く。「さらば」の斷末まで息もつかせぬ氣合には満場狂喜してアンコールを要求し、更に二氏壇上に表はれて、其の歌を繰り返す事を餘義なくさせた。(…)始めて聴く一團のマンドリン合奏樂!山野音樂會は斯様にして常に我樂界に光明たるべく畫力して行く意氣込で御座います。(幸陽生)<sup>43)</sup>』などがある(『月刊楽譜』1915.7.1:36)。

「ヤマノ音樂會」関連の記事は、他の演奏会に比べてかなり多い。これら記事をまとめると、「第二回ヤマノ音樂會」はサルコリの立案、計画によるものであり、サルコリが指導している東京、横濱、各マンドリン俱樂部も出演、他の主要な演奏家は、多くが外国人によるもので、サルコリがマンドリンオーケストラの指揮も行っていたことが分かる。コンサートは成功だったようであり、サルコリの出番が一番の山場とされていることが分かる。サルコリに関するマンドリンの記述が見られ始めたのがこの年である。演奏会に関する写真も、後の「音楽界」に多く掲載されており、注目の高い演奏会であったようである。

### 3-2 サルコリの帰国記事と下半期の音楽活動

その頃、サルコリがイタリアに帰るかどうかの以下の記事が掲載された。理由は戦争によるものである。

「●樂界の名手故国へ歸らん、伊國の蹶起とサルコリ氏、我が音樂界の大いなる損失」『明治四十四年漂然渡來して以來、露國大使令嬢米國大使夫妻横濱モリソン夫人其他内外の社交界に名を知られし數十名の貴顕紳士を指導し、寂寥を極めてゐた我音樂界に一道の△光明を與へつゝある音樂の名手サルコリ氏は今回故国伊太利が愈戈を取るに至つたので其難に赴くべく目下準備中である。此に就き氏が渡來以來最も音樂上に關係の深い妹尾幸次郎氏は「氏は伊太利ミラノの人にして倫敦、巴里、ペトログラート其他歐洲の有名なる都市に於いて世界第一流の名ある歌劇役者メルバ、テトラチニ等と一座して最も主要なる役割を演じた」△立派な経歴を數へ切れぬ程有つてゐる、而し

て四年以前渡来してから今まで獨逸系の音楽しかなかつた我音楽界に情熱的な南歐の音楽、殊にマンドリンなどを輸入し我音楽界に強烈な色彩を與へたのは實に氏の功勞を感謝しなければならない、而して今回故国の形成愈險悪になつて來た頃から氏は頗る痛心せる顔色にて「故国が起つに至らば自分も早速歸国せねばならない」と繰返してゐた、目下なほ△形勢を見てゐるが宣戰が發布され、ば直接歸國の途に就く筈で、それぞれ準備中である、従つて來る六月五日帝國ホテルで開催される音楽界に氏が演ずるウエイデル作曲「運命の力」ドニセッチ作曲「ランメルムーアの花嫁」の二曲は恐らく我國に於ける最後の演奏となるかもしれない、氏の音楽には△日本の咽では到底出す事の能はない高音が出る、マスカーニ作曲「友達フリッツ」などは最も得意なもので、さらでも貧弱な我音楽界に氏の如き大家を失ふのは實に大なる損失である」云々を語つた<sup>44)</sup> (『讀賣新聞』1915年5月24日)

これを受けて4日後の『東京朝日新聞』には「●在日の伊國人▽サルコリ氏は歸らず」のタイトルで「伊國が愈起つたとすると在留の伊國人の進退は何うなるのであらうかと外国語學校教師パストレリ氏と歸国の噂のあるサルコリ氏とを問ふて確かめた▲目下在留の伊國人で東京に居住するものは大使館員を除いて五人である、横濱に三十餘名ある。京濱の伊國人を合して其中に豫備として軍籍にあるものは二三名に過ぎないのである。パストレリ氏は曰ふ、「私共にはまだ何等の報もありません、そりゃ六十萬も行つて居る紐育や二百萬も行つてゐる南米からは早速召集されて歸國する必要もありますが、恚うして日本に來て居る氣は實に少數です、今秋にもなつて参加の必要の起る場合でもあれば歸るでせう、殊に兵役年齢を過ぎた人々は直に歸る程の必要はありますまい」と▲之で見るとサルコリ氏は三十九歳といふのである、音楽の教授や音楽會の準備やに忙しくて歸國などの氣色は更になく至つて沈着いたものである「新聞に私が歸る様な事があればそれは嘘今の處では歸りません」と腰を捨てた日本を去るのを好まないと言つてゐるとは昵近の人の話である。<sup>45)</sup>と、サルコリの帰國を否定する記事が掲載された (『東京朝日新聞』1915.5.28)。この中でサルコリは39歳と紹介されているが、当時サルコリは48歳であつた。その他、1915年後半のサルコリ関連記事を次に示す。

「◎よみうり抄▲サルコリ氏は音楽普及會のためにマンドリン新曲「エスタでアンテナ」「タランテラ」新曲二三曲を寄せたりと<sup>46)</sup> (『讀賣新聞』1915年6月15日)

「六月の樂界は餘り賑かといふ方ではなかつたが仲々立派な演奏會が開かれた五月二十三日東京フィルハーモニー會の第一回演奏會が帝國劇場に開かれ(…)六月五日には帝國ホテルに山野音樂會が開かれてサルコリー氏タム氏メ

ンデルソン嬢等の大演奏會があり<sup>47)</sup> (『月刊楽譜』1915.7:37)

『音楽界』の「日本歌劇史稿」には日本が「洋楽」を「輸入」してからの経過が歌劇中心に考察されている。その中で『伊太利のテノルサルコリー氏は「カバレリアルシティカナ」の一場を上演したが、同氏の聲は日本には驚異の一として迎へられた<sup>48)</sup>』と評されている (『音楽界』1915.8:11)。

以降、コンサートの告知記事にサルコリの名前が見られるので内容を以下に示す。「■慶應マンドリン俱樂部主催大音楽會 七月三日(土曜日)午後七時慶應義塾新築大講堂に開會演奏者サルコリー氏(テノル)タム氏(バリトン)弘田夫人(ピアノ)東京マンドリン俱樂部、横濱マンドリン俱樂部、慶應マンドリン俱樂部(合奏三十名)にて<sup>49)</sup>」の書き出しから始まるコンサート報に書かれた曲目を見ると「フラ、デアボロ」「ナポリ民謡(サルコリ編曲)」「太陽の女」「水賣女」「深山の奥へ」を独唱し、「運命の力」をタムと重唱、「カプリチオスパヌオロ」をマンドリン(田中)とギター(サルコリ)で二重奏を行ったようである。その他「エストウデアアンテナ慶應」「夜警ノ巡査」「ナポリタランテラ」がサルコリ作曲の曲でマンドリン演奏されている (『音楽界』1915.8:62)。

## まとめ

本稿は、1913(大正2)年から1915(大正4)年までの日本におけるサルコリ関連の資料をまとめた。この3年間はサルコリにとって、「日本人に珍しがられた最初の2年」を経た次の期間であるが、引き続き多くの記事が見つかった。

本研究で明らかになったサルコリの音楽活動の内、特筆すべきは、サルコリは「声楽家」としての活動が主であつた来日からの2年を経て、この3年間で「指導者」として日本人に受け入れられていったことがあげられる。また、サルコリの存在によって、日本の学生の間にもマンドリンの流行が見られたとの記事も複数見つかった。サルコリは、声楽のみならずマンドリンに関しても、教授を行うようになっていた。何度かイタリアへの帰國の記事も見られたが、1914年は3か月程度で日本に戻ってきており、1915年は、帰國の記事を否定する本人の談が追って載せられた。サルコリは、日本での生活を決めたのが、この3年間であつたように思う。サルコリの決意と並行して、日本人も、サルコリの事を受け入れており、大阪、京都、名古屋でも演奏會を行ったとの記事があつた。また、「サルコリの人気」が定着してきたことが伺える記事も複数みられた。1913年から1915年はサルコリが「日本に定着した」3年間と言える。

## 引用文献

- (1) 加川琴仙 1913「第二年を迎ふ」。『月刊楽譜』, 第2年1号。
- (2) 『音楽界』1912「サ氏の楽声教授」。『音楽界』(音楽教育会), 第5巻3号, 58-59頁。
- (3) 都の人 1913「サロンの噂」。『月刊楽譜』第2年1号。  
(『月刊楽譜』第2年1号は, ページの表記無し)
- (4) 「サルコリ氏環女史と蓄音器」1913『月刊楽譜』第2年1号。
- (5) 『月刊楽譜』1913「サルコリー氏の新企画」。『月刊楽譜』第2年1号。
- (6) 原信子 1965 144頁。
- (7) 『東京朝日新聞』1912「原のふ子歸る」。11月2日付。
- (8) 田村寛貞 1913「模倣時代の音楽」。『音楽界』(音楽教育会), 第6巻2号, 75-77頁。
- (9) 『音楽界』1913「マンダリンの流行」。『音楽界』(音楽教育会), 第6巻2号, 78頁。
- (10) 『音楽界』1913「帝劇の魔笛と有楽座のボヘーメ」。『音楽界』(音楽教育会), 第6巻6号, 70頁。
- (11) 『讀賣新聞』1913「サルコリー氏音楽会」。6月17日付, 5面。
- (12) 『音楽界』1913「サ氏音楽会」。『音楽界』(音楽教育会), 第6巻7号, 70頁。
- (13) 『音楽界』1913「歌劇演奏会」。『音楽界』(音楽教育会), 第6巻11号, 65頁。
- (14) 『音楽界』1913「ウエルデー記念演奏会」。『音楽界』(音楽教育会), 第6巻11号, 66頁。
- (15) 『音楽界』1913「大阪帝国座の音楽会」。『音楽界』(音楽教育会), 第6巻11号, 68頁。
- (16) 『東京朝日新聞』1913「ヴェルデー音楽会」。11月1日付, 7面。
- (17) 『音楽界』1913「ウエルデー記念」。『音楽界』(音楽教育会), 第6巻12号, 53頁。
- (18) 『東京朝日新聞』1913「明治音楽会」。12月15日付, 7面。
- (19) 『萬朝報』1914「文学及音楽界」。1月1日付, 3面。
- (20) 高折周一 1914「ベルデイ誕生百年祭演奏会」。『音楽界』(音楽教育会), 第147号, 35-36頁。
- (21) 湯原元一 1914「樂の界新曙光」。『音楽界』(音楽教育会), 第149号, 50頁。
- (22) 『讀賣新聞』1914「會いろへ」。3月11日付, 3面。
- (23) 『讀賣新聞』1914「小消息」。3月11日付, 3面。
- (24) 『讀賣新聞』1914「よみうり抄」。3月12日付, 5面。
- (25) 『音楽界』1914「楽劇曲演奏会」。『音楽界』(音楽教育会), 第150号, 76頁。
- (26) 『音楽界』1914「サルコリイ氏」。『音楽界』(音楽教育会), 第153号, 70頁。
- (27) 『音楽界』1914「銀鈴会開会式」。『音楽界』(音楽教育会), 第149号, 口絵。
- (28) 『音楽界』1914「銀鈴会」。『音楽界』(音楽教育会), 第150号, 63頁。
- (29) 『音楽界』1914「マンダリン独習」。『音楽界』(音楽教育会), 第141号71頁。
- (30) 『東京朝日新聞』1914「近代楽大演奏会」。11月17日付, 7面。
- (31) 山本正夫 1914「大正三年の樂界を送る」。『音楽界』(音楽教育会), 第158号1-3頁。
- (32) 『音楽界』1915「近代楽演奏会」。『音楽界』(音楽教育会), 第159号, 53頁。
- (33) 『音楽界』1915「金の鯨銚」。『音楽界』(音楽教育会), 第161号, 44-45頁。
- (34) 『音楽界』1915「新刊楽譜」。『音楽界』(音楽教育会), 第161号, 広告頁。
- (35) 『音楽界』1915「ヤマノ大音楽会」。『音楽界』(音楽教育会), 第163号, 75-76頁。
- (36) 『月刊楽譜』1915「サルコリ氏の独唱振り」。『月刊楽譜』第4年5号挿絵8頁。
- (37) 『月刊楽譜』1915「芸術の花咲き乱れしヤマノ大音楽演奏会」。『月刊楽譜』第4年5号36-37頁。
- (38) 『東京朝日新聞』1915「ヤマノ音楽会」。5月26日付, 7面。
- (39) 『東京朝日新聞』1915「東人西人」。5月31日付, 2面。
- (40) 『音楽界』1915「第二回山野大音楽会」。『音楽界』(音楽教育会), 第164号, 65頁。
- (41) 『東京朝日新聞』1915「ヤマノ音楽会」。6月7日付, 7面。
- (42) 『音楽界』1915「第二回山野大音楽会」。『音楽界』(音楽教育会), 第165号, 52頁。
- (43) 『月刊楽譜』1915「第二回山野大音楽会」。『月刊楽譜』第4巻7号, 36頁。
- (44) 『讀賣新聞』1915「樂界の名手故国へ帰らん」。5月24日付, 5面。
- (45) 『東京朝日新聞』1915「在日の伊国人」。5月28日付, 5面。
- (46) 『讀賣新聞』1915「よみうり抄」。6月15日付, 6面。
- (47) 『月刊楽譜』1915「樂界時報」。『月刊楽譜』第4巻7号, 37頁。
- (48) 歌舞仙人 1915「日本歌劇史稿」。『音楽界』(音楽教育会), 第166号, 10-12頁。
- (49) 『音楽界』1915「慶應マンダリン倶楽部主催大音楽会」。『音楽界』(音楽教育会), 第166号, 62頁。